

近藤禧禊男掛長(医学図書館)  
日本医学図書館協会賞を受賞

協会賞受賞の対象となったのは「東京医事新誌」明治初期の医学雑誌についての考察である。氏の論文は、当時、我が国における漢方医学あるいはドイツ系医学が受け入れられている状況下において、英米系医学を標榜して出発した「東京医事新誌」を通じて、明治初期の医学および医学雑誌

の歴史的、書誌的解明を多角的に多数の文献を駆使しながら、綿密に分析され、その結果として、それが医学雑誌に及ぼした影響その他について詳述されている。これは、初期の医学文献ならびに医学史に対する関心を、読者に改めて示唆する論文として高く評価されたものである。

相互利用書の現状 — その分析と今後の課題 —

数理解析研図書室 福島啓介 小花洋一

1. はじめに

現在、京都大学図書館(本館・学部・研究室 etc.)において、利用者の希望する資料(図書・雑誌 etc.)をすみやかに提供するための一つの手段として、図書館間の相互利用書の使用がある。そしてその使用法については、過去の「静脩」v. 8, No. 2 (1971):「図書相互利用書」の使用について、あるいはv. 10, No. 2 (1974):「相互利用書の使用法について」に記載されている。ところが相互利用書の様式が統一され使用され始めて以来すでに3年の歳月が流れているにもかかわらず、その使用に関する利用状況や分析等の報告は、いまだになされていない。その意味で数研における相互利用書の利用状況から、その存在意義と分析の必要性が導き出されれば本望である。

2. 数研における相互利用書の利用状況

分析に先立ち利用者と資料の2つの観点から以下の5つの項目により分析を進めていきたい。①利用者(階層)②種類(文献)③返却日④学部・学科・研究所別⑤数研からの利用(①~④は他部局→数研利用であるが⑤は逆に数研→他部局利用

である)なお①~③は全体の分析であり④はさらに詳しくそれらを分析している。(期間:昭和43年12月~昭和49年10月)

① 利用者(階層)

表 1

身分 項目		P	Q	L	A	D	V	G	O	T
		K	件数	125	182	75	525	1608	132	189
K	利用 T者率	4 %	5 %	2 %	15 %	45 %	4 %	5 %	20 %	100 %

P:教授 Q:助教授 L:講師 A:助手  
D:院生 V:研究所 G:学生 O:その他  
T:計

①の表より院生の利用が45%でいちばん多く、次にその他20%、助手15%、助教授・学生5%とつづいてゆく。ただしその他に関しては、附属図書館の利用(他大学等からの文献複写依頼による)がほとんどで他に事務官・技官などが含まれている。